

湯川博士と朝永博士、東京大が生んだ二人のノーベル賞物理学者が顔をそろえて十日朝「朝永博士ノーベル賞受賞記念シンポジウム」が京大基礎物理学研究所三階講演室で開かれた。

シンポジウムは同研究所の主任朝永博士が司会をつとめ、日本の物理学界でも朝永博士の受賞後はじめて行なわれる純学問的な学術発表と討論が行なわれた。

加害に感銘を受けた。午後には量子力学について、十一日は強い結合の理論、多体問題(物性)をテーマにした研究発表と討論が行なわれた。

湯川博士と朝永博士は、二人のノーベル賞物理学者は、右のサイドに設けられた湯川博士の特別席を避け、演壇に向かって最前列の中央にいらして腰をうつ

というが、服装にもつたたるまいにも、京大の「地球」な伝統がにじみ出ている。司会の内山肇雄大教授が朝永さんの前に立ち寄り「受賞おめでとう」

をしようという話が出てくる。朝永さんの受賞で、研究所の満場一致でシンポジウムとなった。久しぶりにおもしろい話があがってきた。朝永さんと朝永さんをひきたてた

新素粒子Xを予言

米国際会議で注目の発表

京都府京都市の京都府立総合資料館で開かれた「素粒子国際会議」で、米国の物理学者が「素粒子X」の存在を予言した。Xは、素粒子の一種で、電子や陽子よりも軽いと考えられている。Xは、素粒子の相互作用を説明するために必要とされている。Xの存在は、素粒子物理学の重要な進展と見られている。

このXは、素粒子の一種で、電子や陽子よりも軽いと考えられている。Xは、素粒子の相互作用を説明するために必要とされている。Xの存在は、素粒子物理学の重要な進展と見られている。

c073-001-034

「素粒子X」の存在を予言した。朝永博士は、Xは素粒子の一種で、電子や陽子よりも軽いと考えられている。Xは、素粒子の相互作用を説明するために必要とされている。Xの存在は、素粒子物理学の重要な進展と見られている。

学芸通信

「創造性」めぐり分析

湯川氏らで研究第一集「創造性」の出版された。この本は、湯川博士らによる「創造性」に関する研究の集大成である。本は、創造性のメカニズム、創造性の教育、創造性の社会への影響などを詳しく分析している。

この論文の中で紹介されている湯川氏の「天才論」は、湯川博士の天才論は、天才とは、創造的な人間的な能力を最大限に発揮する能力を指している。湯川博士は、天才とは、創造的な人間的な能力を最大限に発揮する能力を指している。

c073-001-035

c073-001-036